

女 百五人 子供男女 七十六人

半死半生之者 二百人

死骸引取手無之者 拾壹人

腰物取殘し 二百三十六腰

〆九百四十七人 外凡百三十人程死骸無之分

一八月廿日晝町奉行之御届をみしといふ書付には、 三百九十一人

一八月十九日より六日目之御届五百貳人

一一説に即死二百十九人 内百三十人、八月廿日朝檢使請候分、
八十九人、八月十九日引取候分、

此外佃島にて引上しも少からず、二日三日過て羽田沖、また角田川、油堀邊も死骸浮上り候由、

〔蜘蛛の糸巻〕永代橋崩る

文化四年丁卯八月廿九日、深川八幡祭禮の日、朝四つ時比、貴重之御船永代橋の下を通るとて、空船なれども橋番人、繩を橋のきはに引き張りて人を留めけるに、珍らしき祭禮ゆゑ、千家萬戸見ざるはなく、時刻は四つ時、人の出盛りなりしに、大方は皆此永代橋にかゝるゆゑ、一條のなは幾百人を止めし事半時あまり、まちくたびれたる時、それ通れとて繩を引くを見て、數百人の駆け通る足の力、體の重み、數萬斤の物をまろばすが如くなりし故、細き長橋いかでかたまるべき、橋の真中より深川の方へ十間計りの所を、三間あまり、踏み崩しければ、いかでか落ちざらん、跡の者はかくとはしらず、おしゆくゆゑ、おされて跡へすする事ならず、横へひらく道なき橋の上なれば、夢のやうに入水したるもの、多かるべし、此時一人の武士刀を抜きて高くひらめかしければ、是を見て跡へ逃げ歸りて道を開きたり、〇註 此一刀にて多くの人を助けしとぞ、此事世上に